

「生誕130年記念 高島野十郎展」と同時開催の「特集展示 秋山泉」では、鉛筆による精緻な描写で、高島野十郎と同じく蠟燭などみつめる現代の画家、秋山泉（あきやま・いずみ 1982-）を紹介します。古今東西の画家が蠟燭を描き、今なお描き続けています。その中で野十郎と秋山の共通点は、一つの画材だけで描き続ける姿勢と、主題と背景、静物と空間をへだてなく同じ密度で描く画面です。またどの作品と特定はできませんが、二人とも作画に写真を用います。一方で野十郎は蠟燭だけを先に仕上げますが、秋山は背景も含めた全体を描き進めます。同じ蠟燭でも野十郎の火はゆらめきますが、秋山の火は静かです。鉛筆一本に絞って色を離れたこと、さらに薄いヴェールを透かすように、白黒の強弱、濃淡の幅を少なくしているからかもしれません。カーテン、透明な器、蠟燭の灯の空気感も魅力です。静かに蠟燭や空間をみつめる秋山泉に、野十郎作品の印象と自作について聞きました。

—野十郎が蠟燭を描き始めたのは秋山さんと同じ30代。蠟燭だけ先に仕上げる野十郎との違いや共通点は？

秋山：ろうそくに会ったのはクリスマスがテーマの企画展でした。違いはろうそくの炎からも感じるように、私はより静けさを強く求めます。制作の方法として、私もろうそくの形を決めてから背景を描き始めるので、ろうそくに描写が入ってないだけでろうそくの形を先に決めている点は共通していると感じました。

—野十郎は10代から油彩一本。秋山さんは何時から鉛筆一本？画材を選んだのか？画材に選ばれたのか？

秋山：絵を描く画材として自覚的に鉛筆を使い始めたのは中学生くらいの頃。鉛筆画の技法書で、鉛筆一本であらゆるものが表現できる様子を見て感動して使い始めました。鉛筆一本になったのは大学3年の頃。2年次に版画を専攻し、画面に直接触れて描けないことに不自由さを感じ、よりダイレクトに触れている感覚のある鉛筆を選びました。後から気がついたことですが、油絵の具を扱っている際も、固有色は使わず単色に近い色味で制作をしていました。

—カーテン、透明な器、蠟燭の灯などに空気を感じます。描くとき主題と背景という意識はありますか？

秋山：主題と背景は一体のものだと感じています。主題を描くと描けたような気がしますが、背景に手を入れると一気に画面がしっかりしてきます。その度に背景は主題と同じく大切な要素なのだ痛感します。背景に手を入れている手を入れているにかかわらず、主題と背景が一体になって絵として成立していることが大切だと思います。また、「絵」といったときに私が大切にしている感覚は、画面が張っていること。緊張感が画面に満ちていることです。野十郎の作品の中でそれを強く感じたのは月の作品群です。

—今回の展示内容と作品についてご紹介ください。

秋山：今回はなるべく近作で、ろうそくを中心に今取り組んでいるモチーフから、できるだけたくさんモチーフを選びました。

《室内》（2013年）以前住んでいた甲府の自宅の窓。朝方にふと見た寝室の、暗闇の中にうかびあがる窓を見て描きたいと思い描いたものです。

《静物V》（2016年）水の水紋のようなイメージ。ほのかな光を受けて静かに光るガラスの器を描きました。

《静物IV》（2016年）私の作品の中で最も薄い調子で描かれたものの一つ。画面の中でどの濃さで描くかはその時々モチーフの見え方や自分の内面などが影響しますが、いかに薄い調子でたしかな存在を表せるかどうかということを試しています。

《静物III》（2019年）プラスチックは最近描き始めたモチーフ。背景に同化して消えてしまうような見え方に惹かれて描くようになりました。

《静物V》（2021年）、《静物VI》（2021年）最近制作したろうそくの作品。Vは制作動画で描いている作品です。

VIは何枚も撮りためたろうそくの写真に似た構図のものが、それを元にしました。撮影した写真はほとんど取っており、後で見返すと当時気がつかなかった良さを見つけられることがあります。

「みつめる秋山泉」
展示室のご案内

3階



高島野十郎《蠟燭》

秋山泉《室内》



《静物V》《静物IV》(2016)



《静物III》



《静物V》《静物VI》(2021)

第5 展示室

エレベーター

トイレ

第4 展示室

